

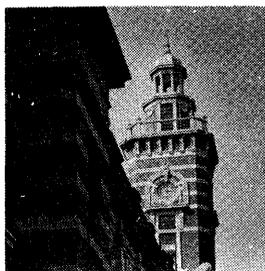
5 あすの横浜をめざして

海のかおりのみちていた静かな横浜村から、人口二七〇万余の大都市横浜までわずかに一二〇年。短い歴史である。

しかし、その間には、文明開化の窓口としての隆盛、震災、戦災、市街地の接収、そして人口急増による都市問題の激化などめまぐるしい変転を経験した。他に例のない厳しい試練であったが、その時々々の市民のねばり強い努力によって克服しつつ今日に至っている。横浜は市民が育ててきた都市である。あすの横浜を展望するには、市民がこの横浜をどのような都市にしたいと考えているかが出発点で

ある。その視点から、市民十一人の方に「私がえがく横浜」と題して執筆していただいた。また、しめくくり市長と二人の市民による座談会を行った。この横浜が、新しい時代にふさわしい魅力と快適さをそなえた都市となるには、まだまだ多くの課題が残されているようだ。

「青年都市・横浜」、そのよりよき成長のために、市民と市役所が各々の役割を果たしながら力を合わせて一步一步前進することが必要だ。あすの横浜はそうした地道な努力の積み重ねのうえに築かれるものであらう。



新たなハマツ子意識を

——象徴としての港通じて——

鴛田 要一（戸塚区 33歳）

「大棧橋から山下公園へ港の見える丘公園へ外人墓地へ元町——この辺りのたたずまいは異国情緒満点、なかなかいいものですよ」——横浜のPRにはこれが一番。が、付け加えてはならないのは「とはいえ道路はどこも狭くいつも交通渋滞、川は汚ないし緑は少なく都市整備面では六大都市最低」。それでもこの欠点多い都市を私は気に入っている。それだけに「もっとよい町に」の思いが常にある。

二百七十万人にも膨れ上がったマンモス都市にあつて実は「連帯意識」など望むべくもないのかもしれない。が、昨年大洋球団が進出した横浜スタジアムが連日にぎわったことは「おらが町のプロ球団」に市民の心が集まったことを示す象徴的な出来事だった。そして自治体運営の根底には「相通じるハマツ子意識」が不可欠と考える。

私はその意識の核として「港」を据えてみたい。緑区民でも中区民でも一番わかりやすい横浜の象徴があるとすればそれは港だからだ。それにはまず港が活気あふれるもの

でなくてはならない。現実には観光面では客船が相次ぎ遠ざかり大棧橋は年々閑古鳥。産業面でもコンテナ化に立ち遅れ横浜経済の一翼を担うどころか地盤沈下の一途。

しかしベイブリッジ、これに連なる東京湾岸道路にメドがついたのを機に施設増強、定期航路・観光船誘致策をもっと積極的に進め港繁栄を目指し官民一体の努力を望みたい。さらに観光資源の乏しい横浜だけに、山下公園へ丘公園へ元町一帯から車を閉め出し、ベルト状歩行者天国を常設、憩いの場として提供するのも一案だ。

一方、成田空港への足も確保でき、海空の窓口を持つ国際都市にふさわしく、若者中心に海外との交流を深め国際感覚をみがかせたり、地元企業が潤うような経済交流の推進にも当然力が注がれるべきだ。姉妹都市をその手掛かりにし、さらに輪を広げることが大事だ。

もちろん都市整備も急務だ。「六大都市最低」のレッテルは一刻も早く返上、快適な市民生活を味わいたい。これと並行して文化面の拠点不足も解消、レベルアップを図りたい。常時地元で展覧会、音楽会、講演会あるいは寄席など多彩な催しを期待する市民の要求は強い。

これらの実現に行政側が本腰を入れなくてはならないの

は事実としても、忘れてならないのは主体はわれわれ自身であり、自らが行動を起こさなくてはならない、ということだ。お互い横浜市民であることを認め合った上で主張すべきは主張し、譲るべきは譲る―権利と義務意識の平衡感覚がとれた市民でありたいと思う。人口増も沈静化したこれからの時代、象徴としての港を通じ新たなハマツ子意識を持ちたい。そして「次代に誇りを持って受け継げる横浜建設を」。一人ひとりに課せられた使命は決して軽くない。

(神奈川新聞記者)

都市づくりに経済人の知恵と経験を

鶴岡 博 (金沢区 39歳)

大学時代東京で生活し、大阪で就職した私が、生まれ故郷横浜へ舞い戻って十三年の歳月が過ぎた。住んでみると横浜は、非常に住みよい。横浜人の人の良さや寛容さは、東京人のみえっ張りや、大阪人の抜け目のなさや比べれば、付き合っていて気持ちまで晴ればれするときがある。しかしながら、経済界に身を置いているものとして、その人の良さがぬるま湯的な中に温存されて、横浜人の自信のなさ

につながっていくような気がしている。東京へのまぶしいスポットライトの影で横浜の燈は、外から見えることなき光となっているのではないだろうか。横浜人は、自分達のふるさとが、このまま次代に受け継がれてよいと思っているのだろうか。もしそうだとしたら、愛情のない、無責任な人達の集まりになってしまうだろう。

横浜で、よく新住民の東京指向を嘆く声が聞かれるが、彼等だけでなく、戦後三十四年間を、リードした人達のほとんどが、同じ傾向をもっていなかっただろうか。人口二百七十万人を擁する大都会になりながら、誇れるものは、昔ながらの港だけという現在の姿を考えてみると、開港以来百二十数年を、無為に過ごしてきた感すらある。

しかしながら、幸いにして、横浜には、いまだに国際都市としての雰囲気と、緑多き田園が、いくらか残っている。このフイーリングを大切に、国際都市にふさわしい、国際的情報中枢機能を有する機関(各国留学生を受け入れる機能を含む)の設立。そして緑多き田園に、各種の研究開発機関の誘致を試みたらどうだろう。

個性ある都市造りは、その市民が、他の都市では味わえない独創性にふれ、それを意識したところから形成される